

千種川と瀬戸内海

—豊かな自然にはぐくまれた文化—

瀬戸内海



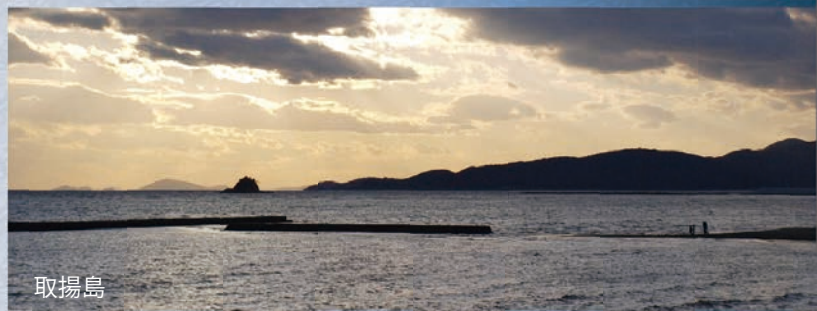
清流千種川



赤穂市街地と千種川



御崎の桜



取揚島



■ストーリー

赤穂は、清流千種川が瀬戸内海に注ぎ込む河口部のまち。千種川は、土砂を河口部に堆積させて文字通り赤穂の土地を創り出し育んだ一方、洪水によって赤穂の景観を一変させることもありました。

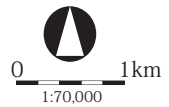
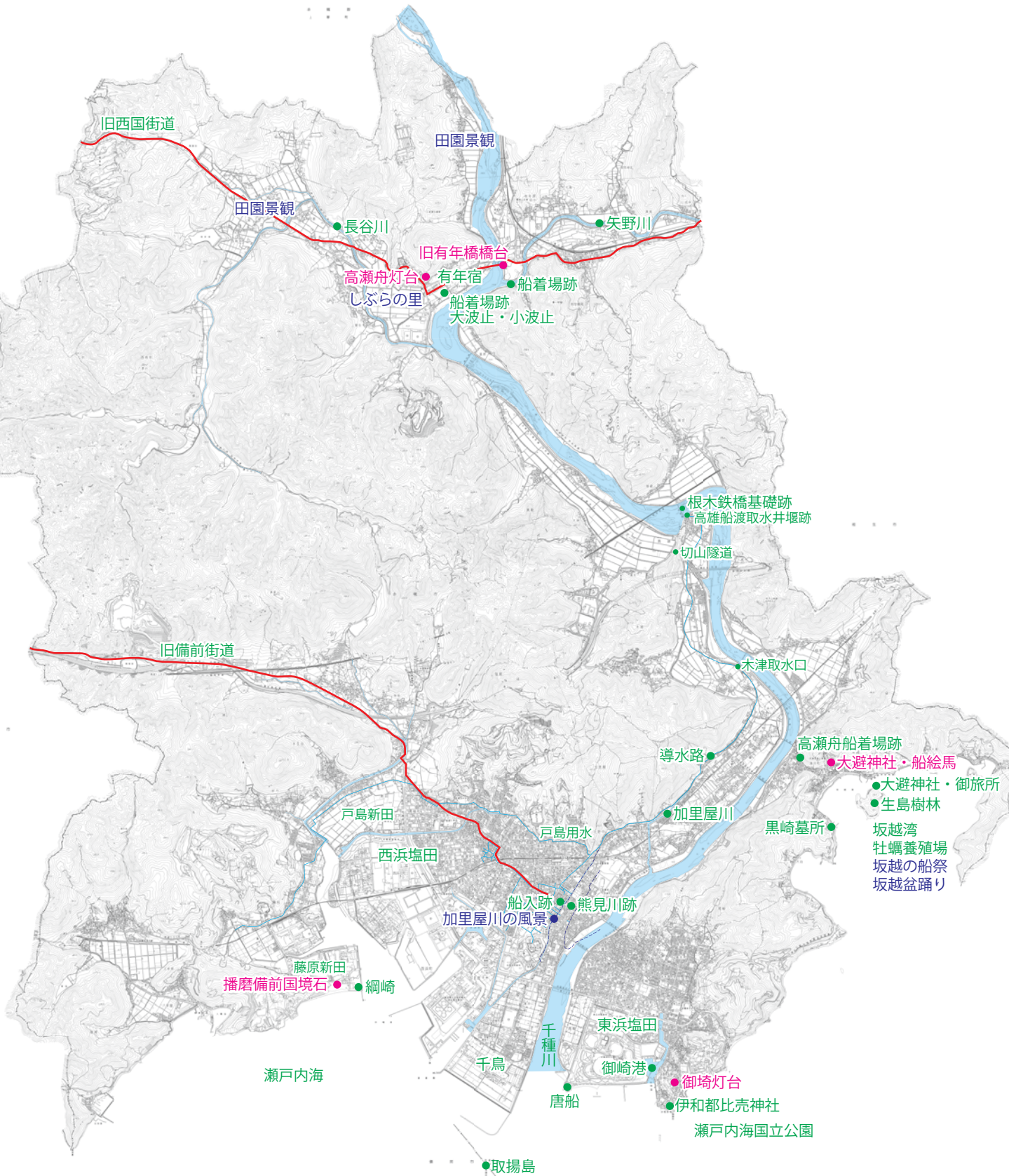
加えて千種川は、高瀬舟による南北交通の重要な流通ルートであったと同時に、東西交通にとっては難所となるため、そこに宿場町が形成される原因にもなりました。このように、千種川は赤穂の自然景観と歴史に様々な点で影響を与えてきました。

千種川が、内陸のつながりを創り出したとすれば、瀬戸内海は、外の世界とのつながりを創り出したと言えます。

波の穏やかな瀬戸内海は、九州から大阪に至る交通の大動脈であるだけでなく、江戸時代には西廻り航路が開発されて西日本の一大物流ルートとなっていました。常に外からの文化と触れ合う港町には、進取の気風が漂い、内外に新たな文化を培いました。

いまだ自然の景観を多く残す千種川と瀬戸内海は、多くの人々を魅了し続けています。

■主な歴史文化遺産の分布



凡例	●もの	●場	●こと
----	-----	----	-----

千種川 ～赤穂を創り、育んだ川～

千種川流域は、比較的急峻な山地と狭隘な平野が特徴で、水深が浅く流速が早いことから清流を誇り、日本名水100選にも選定されています。しかしそれは逆に、洪水がたびたび起こることを意味していました。

洪水は、人々の生活に甚大な被害を与えました

が、一方で運ばれた土砂は河口部に広大な土地を創り出し、人々に新たな生活の場所を提供しました。

特に、現赤穂市街地である河口部はもともと海中にあり、千種川の運ぶ土砂によって生活の舞台が創り出されました。赤穂城や赤穂の塩田も、千種川が運び込んだ土砂がなければ生まれなかったのです。

海中の時代

かつて、現在の赤穂市街地は海中にありました。このころは、「大津」などの地域が、海岸線であったと推定されています。平地が少ないながらも、港がつくられていたようです。

荘園の時代

平安時代 9世紀頃

千種川が運ぶ土砂によって河口部の陸地化が進み、広大な遠浅の海浜を背景として、塩づくりが行われ、東大寺の荘園などにもなっていました。

加里屋古城の時代

室町時代 16世紀頃

室町時代には、海岸沿いの広大な陸地に砦が築かれ、姫路街道、備前街道が整備されました。

赤穂城の時代

江戸時代 17世紀～

さらに陸地化が進み、赤穂城と城下町が海沿いに築かれました。城下町の東西には広大な塩田が造られました。

開発の時代

近現代 20世紀

流下式塩田となっていた広大な塩田はすべて埋め立てられ、大規模な住宅地、工場地帯へと姿を変えました。

千種川河口部の開発

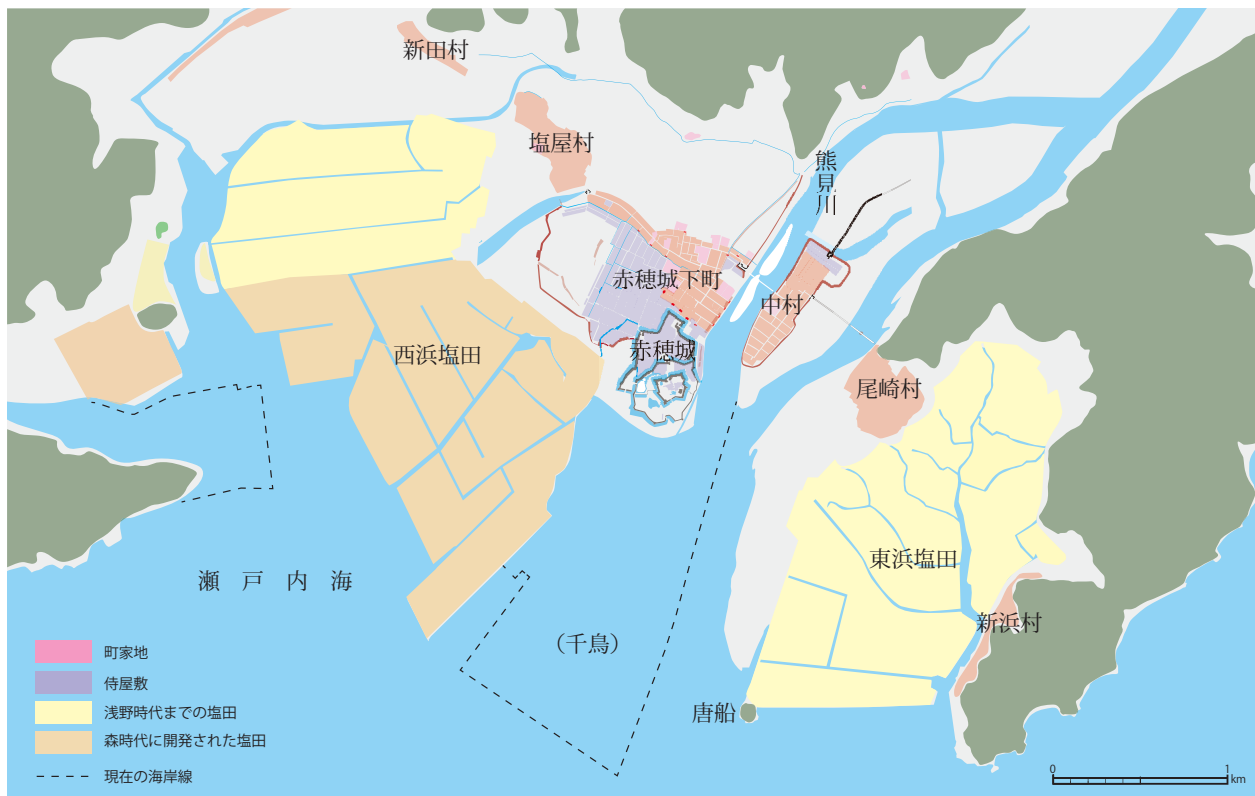
千種川河口部の景観を著しく変貌させたのが、江戸時代の塩田開発です。赤穂城の東西には、千種川の運ぶ土砂が生み出した遠浅の海を埋め立てた大規模塩田が、江戸時代初期から開発されていました。

池田時代に開発され始めていた塩田は、正保2(1645)年に赤穂に入封した浅野家によって東浜塩田を中心に開発され、森時代や近代になって西浜塩

田が開発されて「赤穂の塩」を作り続けました。

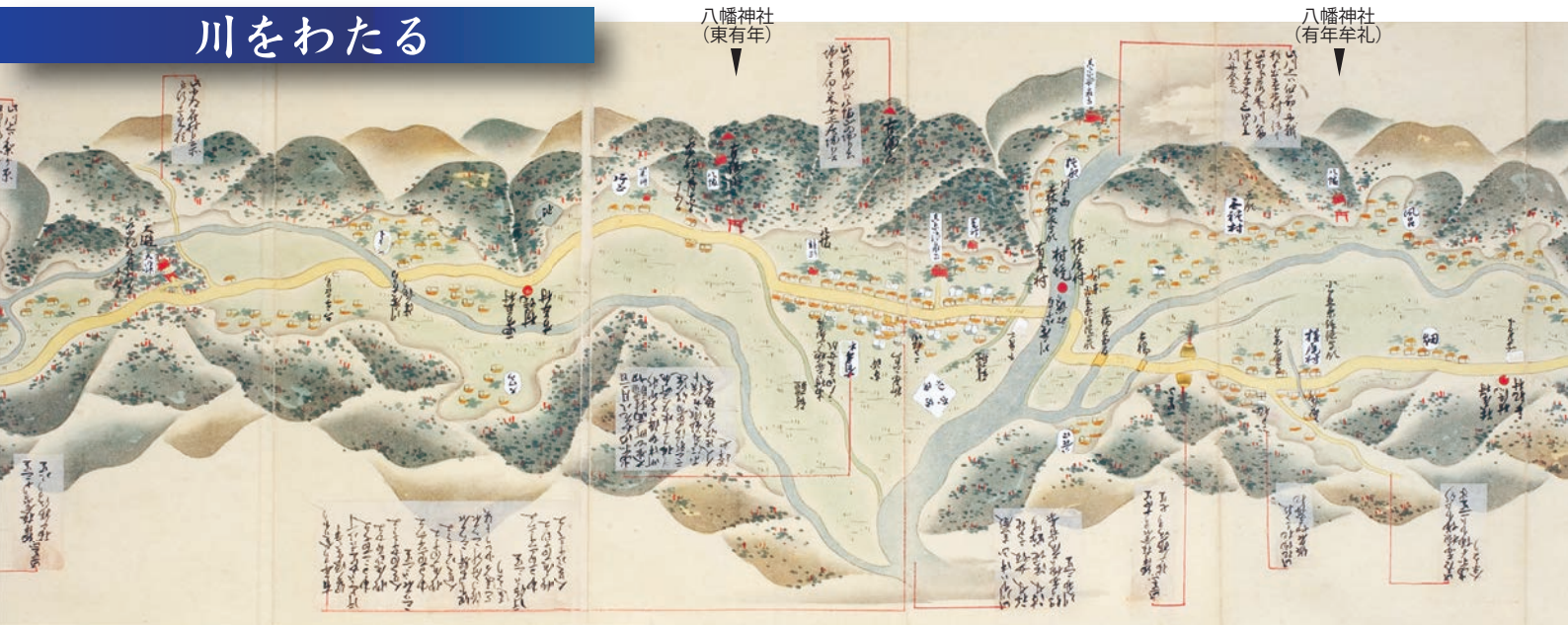
塩田が昭和37(1962)年頃に廃止されると、工場用地や住宅用地、公園用地となりました。

赤穂城の南沖であった千鳥地区は昭和18(1933)年には埋立てられ、その後は昭和23(1948)年から14年かけて開拓が行われました。このようにして、現在の赤穂の姿ができたのです。



江戸時代における千種川河口部の開発

川をわたる



大避神社
(西有年)

渡船

村境
(西有年村)

本陣

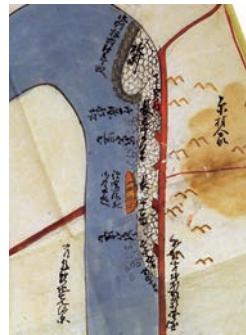
船渡 村境
(有年村)

行程記 (山口県文書館蔵)
江戸時代に萩藩が江戸への参勤交代の際に描いた記録。有年宿は、千種川沿いの宿場町として栄えた。

村境
(横尾村)

現在の私たちにとって、川に橋が架けられていることは自然なことです。江戸時代には技術的に困難な場合や、関所など軍事的理由のために、架橋が許されなかったことがしばしばありました。

千種川でも、赤穂城下町周辺には橋が架けられましたが、それ以外の地域で橋が架けられることは稀で、徒歩渡しや船渡しによって、川を渡らざるを得ませんでした。そのため川が増水した時は渡ることができず、隣接して宿場町が発達したのです。こうした背景から、西国街道沿いの東有年で有年宿が栄えていました。



西国往還千種渡船場絵図
(原村文書
有年原自治会所蔵)



旧有年橋橋台

有年宿東の千種川には、明治43(1910)年になって橋が架けられた。現在も、レンガ造りの橋台の一部が残されている。

川を通る

一方、川は上流と下流とを結び交通路にもなりました。千種川の川岸には各地で波止が築かれ、江戸時代には村ごとに高瀬舟をもつなど、物資の流通に利用されました。

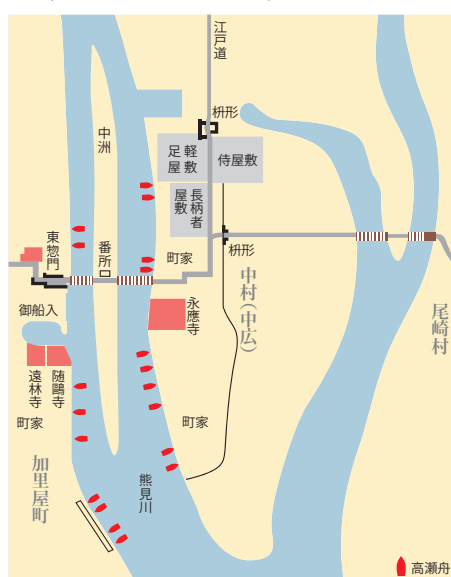
下流部から上流部には、主に塩が運び込まれ、上流部から下流部には、年貢米のほか製塩資材など



高瀬舟船着場跡

坂越上高谷は、高瀬舟によって上流部から運ばれてきた物資を下ろし、坂越湾に浮かぶ廻船に積む拠点であった。現在も石橋の石材が残されている。

が運ばれたといいます。ただし、木津に赤穂水道を取水する井堰があったため、農業用水が必要な6・7月には通行不可となっていました。



赤穂城下周辺の高瀬舟着岸場
浅野・森時代、明治時代の絵図面からの『赤穂市史』による推定図。



高瀬舟灯台

八幡神社(東有年)境内にある高瀬舟のための灯台。建立時期は不明だが、千種川をさかのぼるために船を曳いていく際の目印として利用された。

千種川の風景

千種川は、県下随一の清流を誇るだけでなく自然景観をよく残しており、流域の村々には今も水とみどり豊かな里山の景観を残している点が特徴です。そのため鳥類や水生生物の良好な生息地にもなっており、赤穂市の豊かな自然を体感できます。

市北部は「しぶら(=ヒガンバナ)の里」として知られ、田園風景に朱色の映える景色を楽しめます。



加里屋川



高雄山神護寺跡周辺からみた千種川



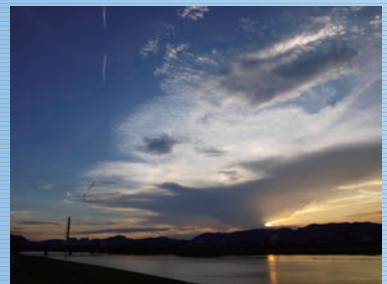
千種川(有年地区)



しぶら(彼岸花)



有年檜原の水車景観



赤穂大橋周辺の景観

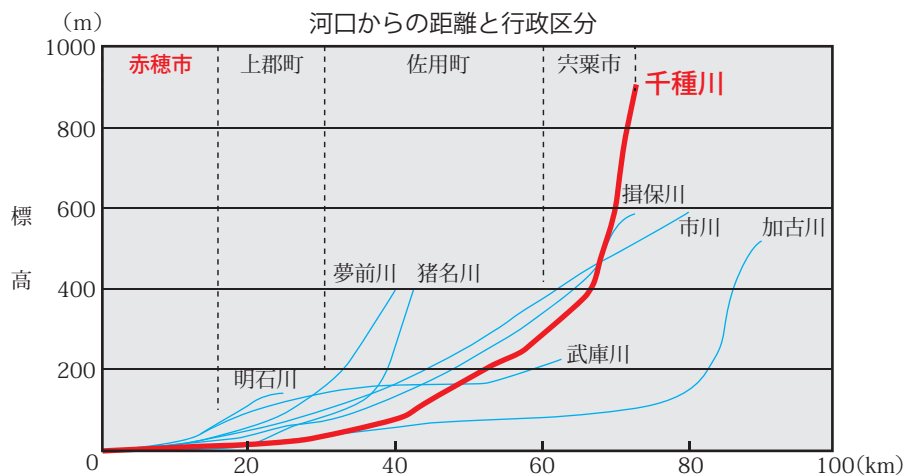
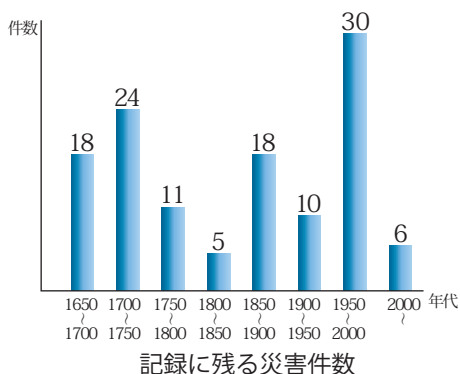
災害の記録

千種川は、播磨の他流域と異なって山地の開析が進んでいるため山が急峻で、また広い沖積平野が形成されていないことに特徴があります。

このような環境下では、川底が浅く流れが速い河川となり、アユなどの魚類が生息しやすい清浄な水質を保つ一方、常に洪水被害の危険性をはらむものでもありました。

特に、明治25(1892)年の台風に伴う洪水被害が甚大で、赤穂市内のほぼ全戸が大きな被害をこうりました。このため、当時赤穂城の東に隣接していた熊見川の本流を、尾崎側に移動させたのです。

川の恵みは、危険と隣り合わせでもありました。



貞享4(1687)年	10月10日 大雨・洪水、破堤27,826間、橋流失29件、家屋流失27軒、潰家1,613軒、死者16人、城内櫓破損
寛政元(1789)年	5月15~18日 大洪水、破堤、高野・木津・下高谷・野中・中村家屋流失123軒、潰家154軒、溺死11人
寛政4(1792)年	7月26日 大風雨、洪水、高潮、潰家238軒、半潰415軒
明治25(1892)年	7月23~24日 大雨、大洪水により破堤、家屋流失569軒、潰家252軒、死者79人
明治35(1902)年	8月11日 台風、破堤1,308カ所、道路1,146カ所、橋梁345カ所、家屋全壊21軒
昭和13(1938)年	9月5日 台風、住家全壊5軒、床上浸水94軒、床下浸水1,701軒、道路45カ所、橋梁14カ所、河川溢水15カ所
昭和36(1961)年	9月15~16日 台風、住宅全壊4戸、床上浸水75戸、床下浸水3,150戸、田畑冠水170ha
昭和45(1970)年	8月14~15日 台風、がけ崩れ39カ所、床上浸水110戸、床下浸水5,200戸、住宅全壊1戸、河川溢水15カ所
昭和49(1974)年	7月6~7日 台風、床上浸水702戸、床下浸水8,037戸、住宅全壊12戸、田畑流失・冠水978ha
昭和51(1976)年	9月8~13日 台風、床上浸水1,759戸、床下浸水8,090戸、住宅全壊11戸、田畑流失10ha、田畑冠水969ha

赤穂市における特に被害の大きい災害

瀬戸内海 ー開かれた世界へ

瀬戸内海は、穏やかな波風とその地形環境から、西日本の大動脈として重要な位置を占めています。瀬戸内海は外の世界との玄関口だったのです。

御崎 豊岩

瀬戸内の風景と信仰

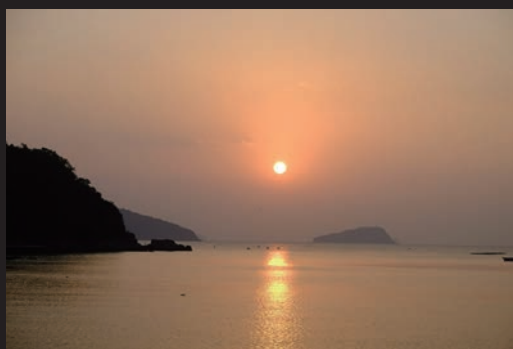
赤穂市沿岸部は、自然公園法に基づく瀬戸内海国立公園に指定され、特に坂越の生島は、特別保護区のほか樹林が天然記念物に指定されるなど、自然海岸が豊かに残されているのが特徴で、瀬戸内独特の多島海景観を体感することができます。

文化12（1815）年には、司馬江漢によって御崎の海岸が「嶋みさき数々見へて景色（ヨキケシキ）」と評されており、古来より「風景奇絶」の景観が維持されてきたことがわかります。

なお御崎地区周辺は、日本の夕陽百選に選定されており、取揚島や鷗護岩周辺の景観は、赤穂を代表する風景と言えるでしょう。



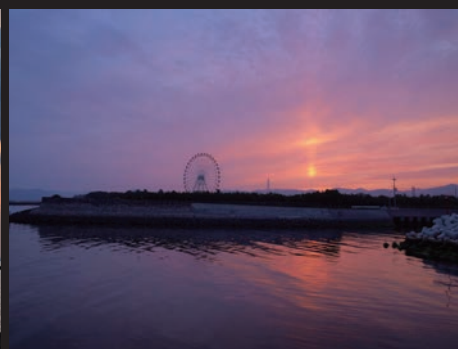
坂越湾と生島



坂越・大泊の日の出



取揚島



御崎港の夕陽

瀬戸内海沿岸の景観は江戸時代から景勝として知られており、信仰の対象にもなりました。現在は坂越地区に大避神社が、御崎地区に伊和都比売神社がそれぞれ祀られており多くの人が訪れています。



伊和都比売神社の鳥居



生島にある大避神社（坂越）の御旅所

港・廻船



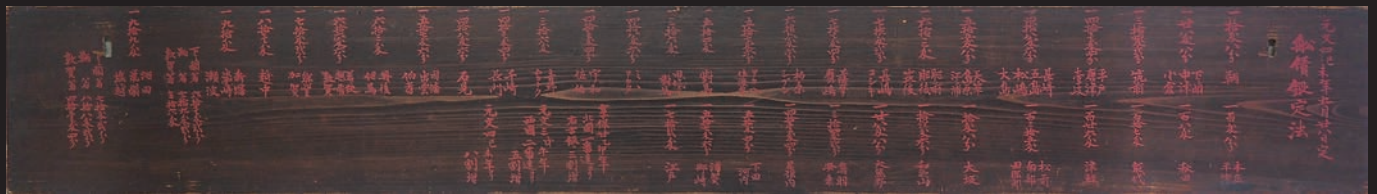
▲村境 (高野村) ▲城主 赤穂城下 ▲天神 ▲丸山 ▲高嶋

行程記 (山口県文書館蔵)
江戸時代に萩藩が江戸への参勤交代の際に描いた記録。坂越大道から坂越湾沿岸の繁栄ぶりがよくわかる。

瀬戸内海は、波の静かな良好な航路として古来より利用され、江戸時代には西廻り航路によって、東北・北陸から西日本一帯が航路で結ばれました。

坂越地区は、湾状地形と風除けとなる生島の存在から天然の良港として栄え、江戸時代には廻船業で隆盛を誇りました。現在も、その名残を残す歴史文化遺産を数多く見ることができます。

船絵馬 (大避神社/坂越)
明和6 (1769) 年のものが、今も絵馬堂に残されています。



酒田 塩越 瀬波 新湯 越中 加賀 能登 敦賀 若狭 丹波 伯耆 出雲 石見 長門 千門 青木 佐野 宇和 佐伯 アカタ 對馬 對馬 佐波 阿波 柏原 薩摩 鹿兒 長門 筑後 肥前 肥後 島原 天草 大松 五島 長崎 志摩 平戸 筑前 小倉 中津 下関 萩 本庄 津之 能代 秋田 平澤

船賃銀定法 (個人蔵) 元文元(1739)年における坂越から全国各地への運送賃の一覧が描かれています。市指定文化財。



坂越盆踊り
平地が少なく広場がなかった坂越では、通りで2列になって盆踊りが行われる。市指定文化財。



坂越の船祭
大避神社の秋祭り。生島にある御旅所との間を船団が巡幸する。瀬戸内三大船祭の一つで、国指定文化財。



黒崎墓所
坂越海域で客死した全国の水夫たちの墓。北は出羽、南は種子島の人々が埋葬されている。妙道寺には、これらの過去帳が残されている。県指定文化財。

海と人の営み



牡蠣の養殖風景 (撮影：出水伯明)

海に面した赤穂にとって、漁業権は重要な問題でした。村同士で山の境界を争う山論と同様その争いは激しく、例えば江戸時代初めには播磨国と備前国の境界について池田家がその設定をし、正保3(1646)年にその所有を分けた記録があります。

鵜和の網崎と取揚島には播磨備前国境石が据えられ、それを結んだラインが播磨と備前の漁業権の境とされており、この漁業権は、日生町福浦が赤穂市となった現在も、そのままとなっています。



牡蠣の水揚げ風景



御崎灯台

昭和38(1963)年に建築されたもの。御崎のシンボリック的存在。

風光明媚な瀬戸内の景観は、多くの人々を引き寄せます。現在、御崎地区の伊和都比売神社周辺は「きらきら坂」と称されて喫茶店や工房が並び、たくさんの人々が訪れています。

また現在、近海の海では牡蠣の養殖が盛んであり、牡蠣棚が浮かぶ景観も一つの魅力となりつつあります。



唐船サンビーチ
海岸沿いにはこのほか2箇所の海水浴場がある。

坂越鍋島周辺の牡蠣の養殖風景



播磨備前国境石

網崎と取揚島に設置されている標石。取揚島については、正保3(1646)年に播磨国、備前国の境界となり、後に石標が建てられたという。



きらきら坂(御崎)

伊和都比売神社の近くにあるスポット。赤穂の海に惹かれた人たちが店を構えている。



恋人の聖地モニュメント

日本の夕陽百選や恋人の聖地に認定されている。

